慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : ベルナール・ ライール著『複数的世界 : 社会諸科学の統一性に関する考察』青弓社、2016年
Sub Title	
Author	小田切, 祐詞(Odagiri, Yuji)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.161- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：ベルナール・ライール著
『複数的世界――社会諸科学の統一性に関する考察』青弓社、2016 年

小田切　祐詞

本書は、現代フランス社会学を代表する一人であるベルナール・ライールの二冊目の邦訳書である。副題が示しているように、ライールがここで企図しているのは、科学の高度専門化によって分散状況にある人文・社会科学に統一性を与えることである。この課題を達成するために、ライールは二つの視角から検討を行なっている。

一つ目は行為論の検討である。ライールによれば、人文・社会科学の目的は、個人であれ集団であれ、「なぜ彼らがおこなうことをおこない、なぜ彼らが考えることを考え、なぜ彼らが感じることを感じ、なぜ彼らが語ることを語るのかを理解すること」（23 頁）にある。この「なぜ」に対する一つの答えとしてライールが本書で提示しているのが、＜身体化された過去＋現在の行為文脈＝実践＞である。この公式によれば、行為者の実践を説明するためには次の二点を考慮に入れることが必要になる。一つ目は社会化過程を通じて個人が身体化した性向あるいは能力であり、もう一つはその個人が行為する現在の文脈である。現在の行為文脈は、ライールにおいて、身体化された性向を始動させる枠組みであると同時に、行為者を社会化する枠組みとして捉えられている。このように性向と文脈を中心に据える自らの行為論を、ライールは「性向主義的＝文脈主義的な理論モデル」（24 頁）と形容している。

だが、フレデリック・ピエルーが指摘しているように（Pierru 2012: 132-133）、性向と文脈と実践を「＋」と「＝」で結ぶこの公式には、不明瞭な点がいくつか存在する。たとえば、複数の性向はどのように折り重なっているのか――この問いは複数の行為文脈についても当てはまる。しかも興味深いことに、公式において「文脈」だけが単数形で用いられている――。性向と文脈と実践の関係は相関関係なのか、それとも因果関係なのか。三者の関係は一方向的なものなのか、それとも相互作用的なものなのか。性向はどの程度まで行為文脈の影響を受けないのか。これらの問いについて、ライールの行為論モデルは何も答えていないように見える。それはおそらく、このモデルが代入可能性をもった何かでしかなく、このモデルだけで社会的現実を直接研究できるわけではないからであろう。その意味でこのモデルは、社会的現実を直接捉えるための理論的枠組みなのではなく、ライールがそうしているように、あくまで「科学的公式」と呼ばれるべきものなのである。

人文・社会科学の統一性を回復するためにライールが行なった二つ目の検討は、認識論についてのそれである。ライールは、次の二つの認識論的立場を批判している。一つは、彼が「科学的帝国主義」（220 頁）あるいは「徹底して実在論的な見方」（265 頁）と呼ぶものである。これは、ある概念や理論を普遍的適合性をもつものとして過剰に一般化する立場を指す。その具体例としてライールは、ハワード・ベッカーのアート・ワールド理論を「場の理論に比べて後退を示している」と批判したピエール・ブルデューを挙げている。もう一つは、「相対主義的多

小田切祐詞「書評：ベルナール・ライール著『複数的世界――社会諸科学の統一性に関する考察』」
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）161-163 頁

元主義」（220 頁）あるいは「相対主義的な唯名論的見方」（264 頁）と呼ばれるものである。この立場は無批判的な態度、すなわち並存する複数の科学的方法の適合性を競い合わせようとしない態度によって特徴づけられる。

これらと対比する形で、ライールは自らが拠って立つ認識論的立場を、「唯名論と実在論を組み合わせたもの」（265 頁）と呼んでいる。その特徴は、概念的・方法的道具の複数性を強調すると同時に、これらの道具の適合性を競い合わせることにある。このような多元主義的でかつ批判的な態度を貫徹する上で重要になってくるのが、理論や方法の「適合性の場」（273 頁）を明確化する作業である。「適合性の場」という表現は、ライールの一冊目の邦訳書『複数的人間』にも見つけることができる。たとえば、ライールは次のように述べていた。「ある種の社会現象を理解する上で強力な理論モデルが、その適合性の場の中心から離れると途端に脆弱なものに見えてしまうとしても何を驚くことがあるだろうか」（Lahire 1998=2013: 359）。「個別の一問題から出発して、さまざまなアプローチの適合性の場を明確にしようとすることが重要」（Lahire 1998=2013: 362）。場の理論の一般的妥当性を主張するブルデューを批判し、この理論がいかなる文脈において発見的価値を発揮するのかを検討している本書第三章は、「適合性の場」の明確化の一例である。

科学の進歩について、ライールは次のように述べている。「ハビトゥスと場の概念のように、一般概念の形態をとって現れる概念が、実際のところ、より一般的な現象の個別の一ケースでしかないということが示されるにいたるとき、われわれはしばしば科学的に前進するのである」（40 頁）。ハビトゥスが「性向」というより一般的な現象の個別の一ケースでしかないことを示すことによって、また、場が「文脈」というより一般的な現象の個別の一ケースでしかないことを示すことによって、ライールは科学としての社会学を前進させようとした。この作業を通じて紡ぎ出されたのが、先の＜性向あるいは能力＋文脈＝実践＞である。このような形で認識論と行為論をリンクさせることで、ライールは人文・社会科学の統一性を取り戻そうとした。

もしもライールが述べるように、一般的なものだと主張される理論や概念に潜む特殊性を明るみに出し、その「適合性の場」を明らかにすることが社会学の前進につながるのだとすれば、我々はそのような観点から彼の科学的公式を検討しなければならない。

上述のように、ライールは自らの行為論を「性向主義的＝文脈主義的な理論モデル」と呼んでいた。この呼称は、科学的公式をアンバランスなものにする二つの行為論への批判を含意している。一つは、文脈を忘却した単なる性向主義である。これは、実践を説明する際に行為文脈の特殊性と多様性をないがしろにするアプローチとされる。ライールはその代表例としてハビトゥス理論と精神分析理論を挙げている。もう一つは、身体化された過去を忘却した単なる文脈主義である。これは、実践を説明するために現在の行為文脈しか考慮に入れないアプローチを指す。このアプローチは、行為者を過去のない存在、たとえば「一度も子ども時代を経験したことがない最終的にできあがった成人」（33 頁）であるかのように扱い、その結果「社会化の過程、記憶（諸記憶）の構成過程、あるいは精神的・行動的習慣の研究を退場させる」（33

頁)。行為には関心を抱いても、行為する行為者には関心を示さないとされるこのアプローチの具体例として、ライールは社会システム理論、アーヴィング・ゴフマンの社会学、合理的選択理論、レヴィ＝ストロースの構造主義、リュック・ボルタンスキーのプラグマティック社会学などを挙げている。

だが、ここで一歩立ち止まって考えてみたい。そもそも行為者の過去とは一体何を意味するのだろうか。より限定的に言えば、文脈主義者が捨象してしまっていると性向主義者によって糾弾される行為者の過去とは、一体どこからどこまでの期間を指すのだろうか。先程引用したライールの記述から考えると、それは成人であれば子ども時代から現在に至るまでの期間ということになるだろう。この場合、ライールの言う「身体化された過去」とは、その期間中に経験された社会化の所産、すなわち性向を意味することになる。だが、行為者を形づくる過去は、生まれてから現在に至るまでの期間に限定されるものなのだろうか。行為者の過去に関する社会学的研究は、常に社会化や初期教育の研究から始めなければならないのだろうか。たとえば行為者の過去を胎児の時代にまで遡って、社会化以前の「受胎から妊娠と誕生を経て、ある社会集団への統合へと至る、連続する過程」(Boltanski 2004: 49）にまで想像力を広げるということもできるのではないだろうか。もしもそれが可能になれば、我々は、社会化をまだ経ていないからといって新生児が必ずしも「社会的に無定形な存在」(Boltanski 2004: 49）であるわけではないという考えに行き着くことになるだろう。

確かに、実践を説明する上で行為者の過去を忘れてはならないと主張することは正しい。だが、行為者とその過去をもっぱら性向と社会化という点から捉えてしまうと、別の概念に訴えていれば視野に入ってきたかもしれない行為者の様態とその形成過程を見逃すことになるのではないだろうか。ライールの認識論をライールの科学的公式に適用してみると、性向主義のこのような問題点が透けて見えてくる。

最後に、本書の翻訳に一言触れておきたい。本書の訳文は全体を通して非常に読みやすいものとなっており、訳者である村井重樹氏の丁寧かつ誠実な仕事ぶりが窺われる。心から敬意を表したい。「ポスト・ブルデュー」の到達点の一つと言える本書が、この日本でも多くの読者に着想を与え、議論を巻き起こすことを期待したい。

【文献】

Boltanski, Luc, 2004, *La condition fœtale: Une sociologie de l'avortement et de l'engendrement*, Paris: Gallimard.

Lahire, Bernard, 1998, *L'homme pluriel. Les ressorts de l'action*, Paris: Nathan.（＝2013，鈴木智之訳『複数的人間――行為のさまざまな原動力』法政大学出版局.）

Pierru, Frédéric, 2012, "Contextualiser les phénomènes sociaux au-delà de l'État-nation," *Gouvernement et action publique*, 3: 125-143.

（おだぎり　ゆうじ　神奈川工科大学ほか非常勤講師）